

## きょうされん福島支部 2022ビジョン(案)

### これからも ここから「つたえ つなぎ はじめる」 地震・津波・原発事故から一步一步前に

#### <はじめに>

すへてが不備であっても、かけがえのない共同作業所をなくさないために結成されたきょうされん福島支部。結成後「小規模作業所問題」の解決のため、多くの学びと議論を経て、それぞれが障害福祉サービス事業所に移行していった。移行した会員事業所は、それぞれ力を発揮し、旧法定施設に負けない実践を積み重ね、障害者自立支援法の根本的問題を指摘しながら、事業を推し進めていた。

そんな中で起きた2011.3.11東日本大震災。会員事業所が積み上げてきた大切な物が、崩れ落ちてしまったあの日。安否確認もままならず、会場もないなか、開催まで危ぶまれた支部総会には、支部結成以来最大数の会員事業所が集まり、お互いの無事と近況を確認しあったことが思い出される。

支部の存在と会員事業所とのつながり、そして全国からの応援が、どれほど安心と勇気と力を生んでくれたか。あの時が、未だ多くの困難を抱えながらも、前に進もうとする会員事業所の福島支部の新たなスタートだったと思う。

あれから7年。会員事業所のほとんどは、職員の確保が困難を極め、事務処理のため机に向かうたくさんの方の時間を求められ、かつ事業所運営公費確保が容易でないなか、疲労感と焦燥感に押しつぶされそうになる状況が生じている感を否めない。結果、働き、活動し暮らす利用者との向き合う時間が十分でなくなったり、利用者や事業所が抱える問題を解決するために、また支部の活動に取り組むことができにくくなったりしている。

これは、国の施策が成果をあげてくれることを求めるもので、頑張ってもすぐには成果があがらない福島の現状は、必死に頑張り続けても、「しっかり」「じっくり」「ていねいに」などはほど遠い現実となっているように感じる。大変で苦しくはあるが、成果があがるのが大切なのではなく、震災後福島が感じてきた本当に大切なことを、福島からあきらめず伝え続け、施策の根本を変えていくことが、助けを求める人たちを助けることのできる会員事業所の姿を取り戻すために、職員が元気に働く姿を取り戻すために、必要なことだということにたどり着く。

そのために、人と人がつながり、会員事業所がつながり、支部と全国がつながり、小さくても、ゆっくりでも、一步一步、歩を進める5年間にしていきたい。私たちはひとりぼっちじゃない。利用者も職員もひとりひとりが、会員ひとつひとつが、支部が、今日より明日がいい日であるように進んでいきたいと、みんな願っている。辛いとき、苦しいとき何度も読み返せるそんなビジョンでありたい。

## <2017 福島支部ビジョンをふりかえり>

①「被災地ふくしまがやるならやるならこんな大会を」と取り組んだ全国大会を、県内で、東北で、全国で多くの人や組織とつながりやりきることができた。震災後の特別な必要な内容を企画できただけでなく、どの大会にも負けない運営力を福島の会員事業所と関係機関、ボランティア、地域が発揮した。全国、東北支部、福島県、郡山市の協力で、多くのお金を自然災害支援基金に残すことができた。そして、ここであらためて気づいたこと。「何もすることのない辛さと仕事があることのありがたさ」「どんな環境であって心休まる場所があることの大切さ」「ひとりも見捨てない。人とつながった時の安心感」が「働く・暮らす・支える」の3分科会の中で被災地のみなさんから語られた。この震災や原発事故で目標や夢を失い欠けていた福島に大切なことを残してくれた。

②「福島だから伝えられることを、伝えなければならないことを」震災後のことを伝える努力と知る努力は続けてきた。ホームページやTOMO便り、そして支部研修や支部総会、県外での研修、全国研修の福島開催の受け入れ等をおこなってきた。今後も伝える努力をしていくと同時に、会員内での状況交換をもっと進める機会がないと県内でも知らないことがどんどん増えていくことを感じた。

③「次世代へのバトン渡しを」とビジョンに掲げ取り組んできた。全国大会でも多くの若い職員が先頭に立ち、やりとげ、その後の支部活動にも名を連ねた。全国の会議にも支部長や事務局長以外の参加を進めた。若い職員の全国の委員会や部会、東北ブロック代表者会議に参加する機会が増え、旅費の支給もしっかりおこなえるようになった。しかし、職場で主任や若い施設長として活躍する若い役員、職員は、事業所での業務が多忙を極め、家庭でも子育てまっさかりの世代であった。また、我が子を被爆から守る闘いの世代でもあった。全国大会後、無認可世代の職員が支部活動を若手につないでいくなか、震災後の困難も、のしかかり、若手が疲れ果てた状況に陥っている。一気に支部の運営も厳しさを増した。

④「私たちの仕事や活動の礎は、障がいのある人たちの現状からはじまった。利用者部会を」障がいのある彼らの現状が、今の仕事や活動の姿であることに誰も異存はない。しかし、障がい当事者が自分のことを自分で話し、それを聞くことが支部の活動のなかで、明確に意識されていなかった反省から、全国大会のあと利用者部会をつくることをビジョンでも提案してきた。しかし、なかなか立ち上げられないのはなぜ?利用者部会をつくり、それを進めていくのに職員の力が必要であること。利用者が自分で意志と希望で移動し活動するために手助けをする仕組みがないこと。時間はかかっているがそれらの議論の5年間だった。職員に余裕のないなか、きょうされんの活動をどう位置づけるのか。きょうされん活動を仕事とするのか。勤務としてとりまれる活動なのか。土日の活動は、超勤や振り休とするのか。休憩休息問題と向き合い職員確保も厳しい中、無認可時代とは違った新たな問題と余裕のない職場の現状がしめされた。

⑤「みんなで集まり、学び議論すること」会議や研修でみんなが集まる機会を作り続けてきたが、参加者が思ったように増えず、参加する会員に限られる状況が続いている。会議資料の充実やタイムリーな全国の優れた実践を徹底的に学べる研修設定をと努力してきた。周知の仕方や時期に改善すべきことがあったとしても、それ以前に会議や研修にでること自体に、魅力がないということなのか。職場で会議が多くなり、研修の機会も増え、仕事も多忙になり、参加者が増えないのであろうか。新たに生じた勤務との関係なのであろうか。小規模作業所時代、学ぶことや他事業所の話を聞くことに飢えていた時代は、会員に限らず、多くの人たちが自前で研修に集まってきた。支部総会で最も参加会員が多かったのは、先に述べたように、震災後混乱のなかで開催を危ぶまれたなかでおこなわれた2011年5月の支部総会で

あった。私たちは、今なにに飢えているのだろうか。

**⑥「やらなきゃならないこと・やる必要があること 全国の取り組みへの対応」** 会員調査や会員賛助拡大・会費徴収、賛助手続き・名簿管理・TOMO の発送、国会請願署名募金呼びかけ・集約・議員訪問、事業活動の取り組み呼びかけ等、きょうされんの業務量が多い。福島支部は全国大会後、事務局長集中型から各担当分散型、ブロック集約型にしてみたが、なんとか関われる支部役員に限られる状況での取り組みとなった。数字でいえば福島支部の現状は、なんとかきょうされんに時間と力をさき、なんとか支部の活動を継続できる支部会計が成り立つ、現状維持の取り組みである。震災後の 100 万の支部活動への寄付等があったので、やれたところもある。支部会計を整理してみると、昨年度は単年度で 40 数万の赤字であった。会員事業所は職場の業務量が増え続け、職員配置も厳しいなか、きょうされんの活動時間を絞り出しながらかついている。どの会員にも同じように同じ事は求めない。それぞれの会員の状況のなかから、やれることや必要だと思うことに取り組んでもらう。その姿勢は変わらず活動を進めてきた。だからといって現状維持だけの活動というだけでもなかった。会員の心が動けば、安永さん裁判支援募金や新たな拠点づくり募金、熊本への震災支援金等、数字があがる取り組みもある。南相馬での要望活動も始まった。決してやらされ感ではなく、自らのなかから、わき上がろうとする力を、つなぎ、あわせる役割が支部にはある。

## 1 2022 福島支部ビジョンの柱

### ●「小規模作業所スピリッツ」なぜ福島にきょうされん福島支部ができたかを忘れない

障害者自立支援法により福島支部の会員は法定事業へと移行した。人・モノ・金すべてにおいて無い無いつくしの小規模作業所時代。支えたのは、目の前に困っている人たちがたくさんいる事実をほっとけないという思いだけ。しかし、活気があり、反骨心があり、熱い心があった。すべてが不備であったが、かけがえのない夢のある場所だった小規模作業所。

しかし、小規模作業所の運営は厳しく、利用する人たちの負担や劣悪な職員の労働環境、施設設備の不備が慢性化し、たえず存続の危機にさらされながら、辛うじて運営されてきた。このかけがえのない場所を存続発展させるために、きょうされん福島支部は結成された。「2012きょうされん福島支部ビジョン」から 15 年。支部の多くの会員作業所は、学習と日々の実践のなかから、障害者自立支援法障害福祉サービス事業所へと移行し、旧法定施設と同じ事業を展開し、積極的に取り組みを進めていった。収入も安定し、モノが充足され、思いだけの運営から、人を雇用できる運営となっていった。

はたして、小規模作業所問題は解決されたのか。なにもなかった作業所時代、あの時より、障がいのある仲間も、家族も、職員も生き生きと毎日を過ごしているのか。

障害者自立支援法訴訟に国は和解、合意文書をとりかわし、障害者権利条約は批准され、差別解消法もできた。障がいのある人たちを取り巻く変化、作業所で働く職員の変化。色々な障害者施策ができた。建物も立派になり、辞めないですむ給料がでるようになり、職員もあの時より増えた。しかし、今、私たちに吹き付ける猛烈な向かい風に、しっかり踏ん張り歩を前に進めていくには、あの時、大切にしていたものを忘れない。変えてはならないことを、腹にすえる必要がある。

## ●「東日本大震災」2011.3.11 福島が強く思い知らされたことを心に

あの震災、そして原発事故から7年がたった。

すぐにかけてくれたのは、きょうされんの仲間だった。事故後の無い無いづくしは、まさに小規模作業所時代を彷彿させ、「ほっとけない・なんとかしよう」という小規模作業所スピリッツに火がついた。それは県内にとどまらず、全国の仲間からの応援にまで拡大していく。大震災、そして原発事故以後の困難な状況を耐えたのも、また全国からの支援も、まさに小規模作業所スピリッツがあればこそだった。

そして、そこから「何もすることがないことの辛さ、仕事があるありがたさを」「人には心安らぐぐっすり眠れる場所があることがどれほど必要なことか」「大丈夫?と訪ねてくれたあの時、見捨てられていなかったと思っただときの安心感」を思い知らされた。

そして今、多くの支援で、形はなんとか整えることができてきた。しかし、震災前と同じにはならない。上手くいくことと、上手くいかないことをごちゃにしながら、必死に踏ん張り続けている。これから先の5年。まさしく、新たな困難との取り組みが続くことは間違いない。疲れたら休もう。決して急ぐことはない。

## ●「ひとりぼっちじゃない」「つながろう みんなで」を心に刻み

### 今日より明日が少しでもいい日であるために 仲間のこと・職員のこと・事業所のこと

「小規模作業所づくりのなかで大切にしたことと今の現状」「あの災害の中で思い知らされたこととこれからも続く様々な出来事」「今、そしてこれから国が進めようとする施策から吹きつける猛烈な向かい風」が福島の会員事業所にのしかかっている。だからこそ、5年間をふり返り、謙虚に受けとめ、そこからもう一度考えていきたい。障がいのある仲間はどう働き、どう暮らしているのか。職員は働きがいを持って、生き生きとこの仕事を続けていけているのか。事業所は大切だと思うことに取り組んでいるのか。

震災後、今にも押しつぶされそうに何度もなるなか、踏みとどまってきたこと。小規模スピリッツからどんどん遠くなる今の国の動きと重ねあわせながら、福島だから伝え、やらねばならないことに取り組んでいく。

今日より明日が少しでもいい日であるために、笑い声を忘れないために、つくる支部ビジョン。そのために大切なものは、ひとつひとつの会員が抱える困難を受けとめ、ひとつひとつの会員のペースに合わせてながら、進んでいくこと。一人じゃないと思えること。福島はこれからもつながることで、明日を生きていく。

## 2 語り合おう 自分たちのことを

### 毎日の実践の礎にみんなで学ぶ・みんなが知る・みんなを知る **研修と訪問活動**

一泊でおこなう支部研修は、学びの場であるとともに、会員同士が交流を深め、お互いを知り合い、つながりを強く、支部活動を進めていくために大切な場であった。その研修会への参加が、固定化、減少化の傾向にある。研修での参加で、各会員との交流が難しくなっているだけでなく、ブロック会議への参加も難しくなるブロックもあるなか、役員による訪問活動が大事な位置をしめる。今後も、多くの会員が参加する研修の再検討を続けていきたいと思う。

#### ① 総会時研修会

利用者、職員、関係者を対象にしたタイムリーな話題での研修

## ② つながり学びパワーアップする研修会

新任職員や若手職員を対象にした徹底的に語り合える研修

## ③ 現状を打破し、未来を切りひらく研修会

事業所の将来構想に必要な内容を全国のすぐれた実践から学ぶ研修

- ・ 事業所訪問(事業所の現実を知る・福島の実現を知る)から学ぶこと
- ・ 任意団体南相馬ファクトリーの発信活動の応援から学ぶこと
- ・ なぜ、参加者が固定化したり、数の伸び悩みがあるのか考えること
- ・ 会員以外の人たちの参加も積極的に取り組む開かれた研修であること
- ・ 全国の研修の紹介や参加を応援する仕組みを作ること

## 3 伝えよう 自分たちのことを

### わたしたちのことふくしまのこと ホームページ・TOMO 便りと国会請願・要望活動

全国大会後、これからも「つたえ」「つなぎ」「はじめます」とホームページで福島を支部を、発信し続けてきた。支部会員や賛助会員への発信、全国への発信、行政への発信、議員への発信とそれぞれ目的をもってこれからも伝え続けていく。各会員が、障がいのある仲間が、職員が、自分たちのことを伝えることを意識して取り組んでいく必要がある。聞くことを意識して取り組んでいく必要がある。

- ① この大震災を風化させない！私たちの声を国に届ける活動を。地元選出国會議員へ1,000筆の署名を届けよう！震災から学ぶべきことを伝え続ける。

国会請願署名	2018	2019	2020	2021	2022
署名数	福島選出国會議員一人に 1,000筆の束を！×議員数 14,000筆				
募金額	70万円を目標に				

- ・ 職員が、利用者が、家族が、事業所の現実、福島の実現、自分の現実を伝えること
- ・ 支部ホームページ、ふくしまのTOMOでの発信を継続すること
- ・ 県への要望活動、市町村への要望活動、差別禁止条例づくりを進めること
- ・ 任意団体南相馬ファクトリーの発信活動を応援し、伝えること
- ・ 全国の研修会を受け入れ、福島のことを知ってもらうこと
- ・ アーカイブセンターへの震災資料提供を進めること

## 4 つながろう みんなで

### 職場で 支部で 地域で

### 会員・賛助・事業と会議

つながることが、福島支部の活動の中心であると考えている。それは、つながらなくては、押しつぶされそうになる恐怖感に、いく度となく襲われてきたからである。つながるために伝える。伝えることでつながる。伝えることとつながることを、ていねいに進めていきたい。

### ① 会議での意見交換・情報共有の強化

支部総会	年1回開催 参加：全会員 私たちが大事にすることを確かめ、支部の活動や予定を決めていく。仲間・利用者の参加を促進し、みんなの支部総会にする。
運営委員会	休止中
役員会	随時開催 参加：支部長・副支部長・事務局長・事務局次長(ブロック担当) 全国理事会・東北ブロック会議の情報を共有し、支部活動の企画・運営をする。
ブロック会議	随時開催 参加：事務局次長(ブロック担当)・各ブロック会員 役員会の情報を共有し、ブロックで活動するための具体策を練る。

- ・南相馬所長懇談会への参加を含め、相双地域の会員事業所の会議等にも必要に応じて参加すること
- ・役員メーリングリスト共有や議事録の送付等会議に参加できなくとも活躍できるようにすること

### ② 各研修会の中で、話をききあえる支部

一歩前進二歩後退の福島。そんな状況でも、お互いの現状を話し合い一緒に考えながら、前へ進むための力となる交流を大切にします。

### ③ ともに助け合う仲間を、応援してくれる仲間を増やす活動(会員・賛助会員の拡がり)

つながりを大切に、きょうされんは大事だよ、と思える会員を一つ一つ丁寧に増やす。

また、そんな仲間を末永く応援する賛助会員をこれから出会う新たなつながりのなかで拡げる。

会員数	2018	2019	2020	2021	2022
2017 41 会員	42	前年度末数+ 1	前年度末数+ 1	前年度末数+ 1	前年度末数+ 1

賛助会員数	2018	2019	2020	2021	2022
2017 364 口	370	2019年4月数 +5	2020年4月数 +5	2021年4月数 +5	2022年4月数 +5

- ・会員数×いくらといった目標設定はせず、個々の会員の現状にそった取り組みを進めること
- ・つながっている実感を持てるような情報の共有をすること
- ・退会を減らし、会員継続、賛助更新を限りなく100%に近づけること

### ④ 支部を支える財源をつくる

「学び、伝え、動き、育てる」 そのための財源づくりをする。

物資販売・カウネット	地域とのつながりにもなる物販。働く仲間カレンダーや夏季・冬季の販売は、支部財源の収益につながる。
自動販売機設置	仮設住宅に置かれた自販機の明かりは防犯の役目を果たすが、仮設の閉鎖にもなって数の減少が進んでいる。新たな設置場所を増やす。

### ⑤ つながりをつなぐ

「JDF被災地障がい者支援センターふくしま」では、「福島はひとつ」のもと多くの団体が結集し、きょうされん福島支部は中心的役割を果たしてきた。同時に、多くの団体と良好な関係を構築し、互いの信頼関係の醸成も図られ、つながりができた。現在支援センターふくしまは閉所したが、必要に応じて他団体との連携を大切にする。つながりをつなぎ、さらに関係を強化し、国内の諸課題への対応や県への要望活動などでこのつながりが深化するよう活動する。一団体では大きなうねりは作れない。

- ・郡山に障がい者差別禁止条例を制定させる会で他団体と連携すること
- ・全障研福島支部と連携した活動を進めるなど必要な場面で、多くの団体と連携すること

## 5 はじめよう やれることから

### 人は財なり共育ち

### 利用者部会と次世代への支部組織づくり

支部を担うのは人である。ひとりでやれることなど、限りがある。ともに進む仲間がいなければ、職場も支部も動かない。過去の支部ビジョンでも、もっとも大切にしてきたことであり、その中で、若い人材が作業所や支部の中で活躍してきた。今、これまで支部を引っ張ってきた人たちが次世代にバトンを渡す時期に差しかかっている状況の中、今までも、きょうされん運動・支部活動をけん引する人材を養成してきたが、冒頭に述べたようになかなか思ったようにはいかない状況がある。

福島は津波、原発事故によって多くの作業所を支えてきた職員を失った。家族が津波で命を奪われ、子どもをあずけられず仕事を離れる職員。放射能からの被爆をさげ、避難する職員。職場を支えてきた多くの職員を福島は失った。もともと、支える人たちが足りなかった私たちの現場であったが、放射能が拡散した福島では、福祉の資格を持つ求職者が足りず、震災後、利用を希望する障がいのある人たちのニーズの増加に応じきれない状況が続いている。資格の有無に関わらず、福島支部では、働きながら、職場を、支部を支える人材を育てる取り組みを強化することが急務である。

若い支部役員支部業務補助	支部業務補助を引退した支部役員等がサポートし、業務を進める
支部研修会の企画運営進行	「将来構想を作り出す研修（施設長研修）」「将来を背負って立つ研修（新任中堅研修）」「総会時研修（タイムリーな内容研修）」「実践報告研修（事業所実践報告）」等を軸に、事業所や支部をささえる人材の発掘と育成への取り組みを意識して進める
南相馬支援チーム職員研修	南相馬の主任職員研修と新任職員交流会の取り組みに参画する
支部役員会への参加	若い人材が多くの場を経験することで、支部活動や職場での実践の活力を得られるようにする
全国研修会・会議等への派遣	

### ①みんなが進んでいくために 相双地区や被災した事業所の支援と交流

- ・ 全国支援チームと連携し、同じ福島の中かが、共に悩み、共に苦しみ、共に進んでいくこと
- ・ 被災した事業所との情報交換と職員間の交流を、会議、研修等の場で進めていくこと

### ②障がいのある仲間が参画する支部づくり

福島支部では総会への障がいのある仲間の参加を呼びかけたり、年1回の利用者交流会を企画してきたが、総会参加の不振や、交流会の大震災・原発事故後の中断が続いていた。「私たちのことは私たち抜きにきめないで」言いつつも、実践が伴っていなかった点も否めない。

作業所づくり運動の原点は、障がい者(利用者)・家族の願いの実現だった。支部活動において、障がいのある仲間の願いや声を絶えず聞き続けるということを忘れず、活動、運動の中心に据えていく。この大震災・原発事故の大きな厚い壁に、障がいのある仲間も一緒に立ち向かっていくために、彼らがこの震災で受けた多くの困難を明らかにし、彼らと活動する支部づくりを目指していく。

全国大会はこのきっかけとなり、全国大会を契機に一気に動き始めたかに見えたが、その後5年の時間をかけ、スタートを切る。

### ●障がいのある仲間の願いを形に

利用者部会のスタート	障がいを持つ仲間同士の交流と自分のことを話す機会やその話を聞く機会を大切にしたい利用者部会をスタートさせる
------------	-------------------------------------------------------

- ・ 2018年度は、東北ブロック交流会の福島開催を実施すること
- ・ 国会請願行動や要望活動に当事者の参加を積極的に進めること

### <おわりに>

「あの日からの日々の現実」、「新たにしめされる福祉施策」、猛烈な向かい風が吹きつける中、福島は震災後の張りつめ続けてきた気持ち、切れそうになるときがある。しかし、無認可作業所を立ち上げ、あの震災の中、事業所を再開してきた福島は、本当に大切な物がなんなのか、ひとつひとつかみしめ、思い知らされながら進んできた。猛烈な向かい風は、折れそうになる私たちを吹き飛ばしてしまいたいそうだけれど、しっかりと手をつなぎあい、みんなで踏ん張れば、踏みとどまることができるような気もしている。

「希望なんてみあたらない。ならば俺たちが希望になろう。あきらめなかった人たちがいたと。」  
この5年間、あきらめることなく、進んでいきたい。